

礼拝のしおり (2021年5月号)

～主の御前に一つにされて～

あなたの重荷を主にゆだねよ。
主はあなたを支えてくださる。
主は従う者を支え
とこしえに動揺しないように計らってください。
(詩編 55 編 23 節)



五月晴れの天空を、鯉のぼりが仲良く元気に泳いでいます(角笛幼稚園)。

主の聖名を讃美いたします。3月に緊急事態宣言が解除されたのも束の間、4月に再び発令されることとなり、さらにはその期間が延長される事態となっています。終わりが見えない道を延々と歩き続けなければいけないような状況を生きるということは、やはり厳しく辛いことだと深く思わずにはおれません。

先日の夕方、ある町を歩いていた折り、飲食店が続く通りに出ました。歩きながら、通り過ぎるいくつかの飲食店の中の様子が窓越しに目に入ってきました。営業時間が限られている中、思いのほか多くの人で賑わっている店もあり、大丈夫だろうかとの思いを抱きながら隣の店に目を移すと、誰もお客がいないガラとした店内に所在なく佇む店の人たちの姿がありました。現在の厳しい状況によって、日々の生活にまでその影響が及ぶことになっている人たちがどれほど多く出て来ていることだろうかと思わされます。

聖書は、「あなたの重荷を主にゆだねよ」と私たちに語りかけます。私たちの「重荷」。私たちが人生を生きる時、重荷など何もないかのように軽やかに生きられる日々もあるかもしれません。しかし、多くの日々は、何らかの重荷を抱えながら歩んでいる日々だと言えるのではないのでしょうか。そして、時に、ずっしりと肩に食い込むような、まさに「重荷」を抱えて歩まねばならない日々があります。自分の足でしっかりと立って軽やかに歩んでいた日々など嘘のように、行き詰まり、途方に暮れ、一歩も歩けなくなるような時さえあります。

聖書が「あなたの重荷を…」と語る時、私たちが人生において出会い、それらを抱えて生きなければならない多くの重荷を本当に分かっているだろうか。そのように思う私たちであるかもしれません。しかし、聖書が証言するのは、私たち人間を創造され、私たち以上に私たち一人ひとりのことを知っておられる神さまです。そして、その神さまを信じて歩んだ多くの人々の数知れない経験によって裏打ちされた書物が、聖書であることを思います。

「あなたの重荷を主にゆだねよ。主はあなたを支えてくださる。主は従う者を支え、とこしえに動揺しないように計らってください」。そのことは確かなこと、神を信じて歩んだ多くの人が経験してきたことだ。だから、あなたの重荷を、ほかの誰でもない主なる神さまにゆだねて、神さまのふところに飛び込むように、神さまを信じて生きてごらん。神さまはあなたをしっかりと支えてくださる。聖書は、そう語りかけるのです。

「神を信じることなんて弱い人間のすることだ」。かつて私自身が、面と向かって言われたことがある言葉です。確かにそうかもしれない。その時は、そう思いました。しかし、今は、こう思います。神を信じて生きるということは、一つの「冒険」をすること、勇気をもって生きることなのではないか。自分の足で立てる地点を確かめながら生きようなどころから、聖書の語ることを信じ、私たち自身の存在全体をゆだねるようにして、人生を賭けて神さまのふところに飛び込んでいく。信仰に生きるとは、そういうことだと思ふからです。

そして、その時に知るのは、自分の足で軽やかに歩いていたと思っていた日々も、どれほど主なる神さまの恵みの中で生かされていた日々であったかということです。その神さまの恵みの御手にすべてをゆだねて歩いていく。試練の日々が続く中です。しかし、その日々が、信仰に生き、神さまに支えられて生きることの確かさとその幸いを、多くの人たちと共に新たに知っていく日々ともなりますように。そのことを祈ります。

◎5月16日以降の主日礼拝の予定

礼拝の予定	聖書・説教題	交読文	讃美歌 21
5月16日(日)	イザヤ書 6章 5～8節 マタイによる福音書 15章 10～20節 「人を汚すもの、清めるもの」	詩編 51編	2, 503, 436, 28
5月23日(日) ペンテコステ礼拝	エゼキエル書 37章 4～6節 ローマの信徒への手紙 8章 26～28節 「聖霊のうめき」	詩編 42編	353, 343, 342, 26
5月30日(日)	詩編 63編 8～9節 マタイによる福音書 15章 21～28節 「小犬の信仰」	詩編 13編	11, 149, 531, 29
6月6日(日)	詩編 85編 9～14節 マタイによる福音書 15章 29～39節 「神への賛美、感謝の祈り」	詩編 40編	6, 151, 475, 26
6月13日(日)	エゼキエル書 36章 25～27節 マタイによる福音書 16章 1～12節 「神の支配を見る心」	詩編 36編	152, 51, 356, 27

☆5月16日以降の主日礼拝、その他の集会等について（お読みください）

新型コロナウイルスの感染防止を考慮しつつ、5月16日以降の高井戸教会の主日礼拝について、また子どもの教会等について、以下にご案内いたします。

◎主日礼拝について

主日の礼拝については、毎週日曜日、第一礼拝（午前9時30分開始）と第二礼拝（午前11時開始）という2回の礼拝を行う形を継続しています。どうぞいずれかの礼拝にご出席ください。礼拝に出席なさる方には、受付での手指の消毒、マスクの着用をお願いいたします。また、礼拝堂での互いに距離をとっての着席、礼拝堂の換気等の感染防止対策も続けていきます。

変異型ウイルスが大きな広がりを見せ、感染の拡大がまた厳しさを増してきています。健康等の理由やそれぞれのご事情から礼拝出席をためられる方も少なくないと思います。4月25日から毎主日の第二礼拝のライブ配信（礼拝の生中継）を始めましたので、ぜひご自宅で視聴しながら礼拝をお捧げください。ライブ配信を視聴したい方は、高井戸教会までご連絡ください（TEL 03-3333-2465）。

なお、礼拝説教の動画のアップロード、『礼拝のしおり』の発行も続けていきます。どうぞご利用ください。

◎子どもの教会について

幼小科は、現在休止中です。教会堂に集まったの礼拝の実施も検討しつつ、今年も夏期には近隣の公園での集会を実施していく予定です。

中高科は、5月9日(日)から毎週日曜日午前9時30分より、高井戸教会2階の会議室に集まったの礼拝を再開します。互いに距離をとっての着席、部屋の換気等の感染対策をなして行いますので、中学生・高校生の方々にぜひ参加していただければと願っています。

◎その他の集会について

礼拝以外の諸集会を教会堂に集まる形で行うことは難しい状況が続いています。インターネットも活用しつつ、工夫をしながら、どのような形で集会を行えるか検討していきます。

「主の復活からの出発」（マルコによる福音書 16 章 1～8 節） 牧師 七條真明

キリスト教会の歩みの始まりに何があったかということを考える時、主イエス・キリストの十字架の死ということと共に、その御方のよみがえり、復活ということが決定的であった、そのことは間違いありません。主イエスが生きておられる。その事実が、主に従う者たちを新しい歩みへと促していったのです。

マルコによる福音書の第 16 章 1 節以下には、主がご復活なさった日曜日の朝、十字架に死なれた主イエスの体が納められた墓において、三人の女性たちが経験することになった出来事が記されています。彼女たちは、何のために主イエスの墓へと赴いたのか。それは、安息日が終わってすぐに、彼女たちが「イエスに油を塗りに行くために香料を買った」（1 節）と記されることからよく分かります。十字架に死んで、墓に葬られたイエスさまの体に香料を塗るためです。それは今日で言えば、防腐剤の役目を果たすものであると同時に、死んだ体が放っておくと発することになる臭いを抑えるためでもあったと言えます。イエスさまが死んでしまわれたからには、イエスさまの死んだ体が少しでも傷まないようにする。自分たちにできる精一杯のこととしてあるのは、今はそれだけだ。彼女たちは、そう思っていたのです。

しかし、彼女たちには、気がかりなことがありました。それは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれる」だろうかということでした（3 節）。当時の墓は、横穴の空いた洞窟のような形で、その入り口に大きな石をもって蓋がなされたのでした。主イエスの墓へと赴く三人の女性たちにとって、大きな石が自分たちには到底動かしがたいものとして墓の入り口をふさいでいることが、気がかりでならなかったのです。

私たちの人生の歩みにおいても、時にそういう大きな石のような妨げに直面することがあるのではないのでしょうか。小さな石や中くらいの石、そういうものにはしばしば出くわす。そういう目の前の石を何とか動かすようにしながら、私たちは前へと進んでいく。それが人生の歩みだと言えるかもしれません。しかし、時に、本当に大きな石に直面するのです。他の人の助けを借りても取り除くことができない石が、進むべき方向に立ちふさがっている。動けない。そういう思いで立ち尽くさざるを得ない時があるのです。

最初のイースターとなった日曜日の朝、三人の女性たちは、主イエスの墓へと向かう途中、自分たちの力ではいかんともしがたい壁がたちふさがっていることに気づいたのです。自分たちではどうすることもできない大きな石が、主イエスの体と自分たちとを隔ててしまっている。その事実です。それは、彼女たちにとって、墓の入り口におかれた単なる大きな石というだけではなく、主イエスは死んでしまわれたということ、そして、その事実によって主イエスに従ってきた自分たちの歩みはもう終わってしまったのだということ、そういう現実を厳しく自分たちに突きつけてくるものだったのではないのでしょうか。もう前へと進ことはできない。その思いが彼女たちの心を支配していたのです。

恐らく、彼女たちは皆、墓へと到着した後も、望みなくうつむくようにして立ち尽くしていたのではなかつたらうかと想像します。それは、4 節がこう書き記しているからです。

「ところが、目を上げて見ると…」（4 節）。それは、望みなく、うつむいて、彼女たちが目を地面に向けていたということを示すものではないのでしょうか。しかし、ふと目を上げて見ると、そこで彼女たちの視線に入ってきたものがあったのです。それは、彼女たちにとって気がかりであった大きな石が、既にわきへ転がしてある、その光景です。そして、さらに、その墓において、彼女たちは驚くべきことを経験しました。墓の中には、白い衣を着た若者（恐らく天使でしょう）がいて、彼女たちに告げたのです。「あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない」（6 節）。

マルコ福音書は、最初のイースターの日曜日の朝、主イエスの墓に赴いた三人の女性たちが、その墓が空になっていたことを目撃し、「恐ろしかった」（8 節）と彼女たちの思いを伝えています。主イエスの墓は空になった。主イエスは復活なさった。神さまの御業がそこで行われた。それゆえに畏怖の念を抱かずにはおれなかったのです。

主イエスは死んでしまわれて、もはや自分たちとの関わりは切り離されている、そう思っていた三人の女性たちでした。その死の事実の前に、もはや前へと進めない、そう思っていた望みなき状況を象徴するかのような、墓をふさぐ大きな石は取り除かれていました。神ご自身によって、復活された主イエスご自身によってです。

死にも打ち勝って復活された主イエスが共にいてくださる。私たちは、たとえ死をもってしても、主と切り離されはしない。主イエスと私たちを隔てる妨げの石はないのです。わたしは共にいる、勇気を出して歩め、と語り掛けていてくださる復活の主がおられるのです。